

## 南町の古い記録

### 徳川氏時代の南町

天正十八年、当時の水戸城主江戸氏を滅ぼして、水戸城に

移った佐竹義宣は、城郭の規模を拡張して、三ノ丸の地域に土

家以上の邸宅を与え、奈良屋町（現在宮町二丁目）、南町、

白銀町（元白銀町、現在南町一丁目）、仲町（二、は南町と

大町に各割された）、大町、西町などを城郭の西方をひら

て、商家を招いて城下町とした。

常総奥陸の四ヶ国を領有し、五十四万五千七百七十四石五

斗九升、天下三大姓の一の佐竹藩治下となり、一躍水戸は地

方文化経済の中心地となった。しかし佐竹氏の栄華もなが

はなく、慶長七年、水戸在城僅か十三年余で、秋田藩二十万

石に遷され、佐竹氏の常陸に於ける五百余年の歴史は終った。

かくて徳川氏の所領となり、慶長十四年、徳川頼房が、水

戸に封じられ、天下の副将軍の居城となった水戸城は、城郭

の大改修が行なわれて、東と西に城下町が拡張されて、ほ

水戸に市制が布かれた当時の地域となった。

この城郭の拡張には、城西の還地帯が埋立てられ、大町、

⑬

仲町、南町等にあった商家は凡て下市に移され、そのあとが

割りつけられて諸士家数となった。

以後三百年、南町は、人通りも稀な屋敷町で、僅か一間半

(二、三メートル)の道の両側は一級高くなり、屋敷門がひ

っそりと並んでいた。

徳川末期となると、水戸藩も、明治維新への胎動のなかに

置かれた。万延元年三月三日、白雪を踏んで登城する井伊直

弼を、桜田門外に襲った水戸と薩摩藩士の行動は、よく知ら

れている桜田門事変。

水戸藩内では、これが元治甲子の乱につながり、さらに天

狗、諸生党の争闘となり、明治元年十月一日から二日にかけて

その「弘道館の戦い」となって、水戸藩も終りに近くなった。

明治二年、版籍奉還、徳川昭武水戸藩知事となって、水戸

藩の歴史は終った。

### 明治期のなかの南町

明治二十二年、一月十六日、水戸、小山間に鉄道が開通

(現水戸線)すると、水戸はようやく近代都市への起点にた

された。

そして四月一日、水戸に市制が施行され、服部正義が、初

代市長になった。当時の人口は二五、五九一人(男二、七

⑭ 四五人、女二、八四六人)世帯数五、〇三二であ

た。

これよりさき、明治十九年の年末、裡信願寺町(泉町四丁

目)から出火し、十四ヶ町を焼き、上市のほとんどを焼いた

所謂「上市の大火」後、時の県令安田定則が、焼失区域の市

区改正を行ない、県庁周辺や市街地が一変した。

その大要は、向井町広小路(いまの大工町一丁目歩道橋の

橋袂)にあった広い場所には、数十戸の家が「島」のように

なっていたが、その数十戸を取り払い、新鳥見町(泉町二丁

目)から、泉町、裡五軒町、表五軒町を貫ぬいて上金町まで

の新道を開き、鷹匠町、南町に出て、西町に接続する道路を

作り、黒羽根町から北へ、仲町、大町を田見小路(北見町)

から、北三ノ丸への空濠を埋めて道路とし、又元白銀町、南

三ノ丸、南町の間にあつた空濠を整地して、現在の水戸郵便

局、水戸商工会館、水戸署、茨城相互銀行のある市街地とし

た。

それと当時段に着手していた現在の銀杏坂、水戸郵便局か

ら、東照宮裏参道下から、水戸駅前までの道路の開通を急ぎ、

空濠にそつて屈折していた道路を直線とし、南町の道路も拡

げられて、ほ、今日の道路の原型が出来た。

だが、南町の周辺は焼野原で、そのなかに数戸の家が点在

していたにすぎなかった。

その南町の焼跡が、一躍水戸の繁華街に変貌する基盤は、

諸士屋敷跡を買つて進出してきた商家の意慾的な業績による

ものであつて、水戸、小山間の鉄道開通がその端緒となつた。

それと、諸官衙の設置、教育諸機関、学校の創設等が、南

町の商圏となり、更に水戸に歩兵第二聯隊が佐倉から、工兵

第十四大隊が習志野から移転(明治四十二年)によること

が、これは水戸市の発展に寄与したろうことが考えられよう。

店頭に自転車をはなれて撮つた写真が宣伝になつたのもそ

の時代、なにして一台大枚六十円。米価が一俵(60kg)金三

円から三円七、八十銭。自転車一台が、米俵二十六、七俵。

高いばかりではなく、物珍らしかつた。

### 五十年前の南町

五十年前といへば大正十一年頃である。

その頃の水戸は、市役所も現在の三ノ丸に移り、洋風の庁

舎が地方都市には珍らしがられたし、市内も県庁所在地とし

ての性格がと、のつて城下町から産業都市に移行しつ、あつ

た。

水浜電車(水浜電車株式会社)が、水戸・平戸間に開通し

て、人のゆき、が多くなる、南町の商店界は、家並みがな

らび、泉町を凌ぐ商店街となつた。

大正十四年水浜電車が、大工町まで延長されると、水戸の商店街は大きく変わった。(注 大工町谷中間昭和二年開通、昭十九年谷中上水戸間開通)

この南町に、昭和十年常磐・五十銀行が合併し常陽銀行と名った常陽銀行本店があり、明治二十四年七月、関戸覚造が社長で、「いはらき」と平仮名題号の郷土新聞が創立された。当時は「かないはらき」と呼ばれて、県民に親しまれた新聞社があった。(現在北見町に移った)

もともと、南町は二丁内であり、俗称として、一、二、三丁目にわかれていた。その三丁目は、昔からの商店街であった。泉町に接しているところから、いちはやく商店がたちならんだ。

いまから百五十年ほど前とあるから、天明年間のこと。泉町広小路に檜野屋という豪商があった。こゝは南町広小路といわれたところで、南町との界に郭門があり、荒町見付ともいわれ、元禄三年に泉町見付となった。その檜野屋の前に舞台をこしらえて、都々逸坊扇歌の興行があった。集まるもの三千、というから話半分としても大変な人気だ。

客から「泉町広小路とかけて、何んと解く」と声がかゝると、即座に「三味線にのせて、  
「平清盛と解く ワイナリ」  
と答える。

「そのころは、火の病(檜野屋前)で、ござんすよ」  
集まるもの、その当意即妙の答えに、感嘆したと、古老の云い伝えにある。

この一事をみても、南町も三丁目は賑やかなところと考えられようか。

さて、昭和期になって、十二年、日華事変がおこり、水戸二連隊の出動となると、にわかに戦時色が濃くなり、十五年、紀元二千六百年式典が挙行されたりして、国威ますますあがったが、不幸は其処にあった。

日華事変は拡大をつげ、遂に昭和十六年、米・英に対する宣戦布告となり、太平洋戦争に突入、国民の生活も戦争遂行のために協力を強いられ、諸物資は統制され、また配給制となり商売より勤労奉仕にかりたてられた。かくて昭和二十年八月二日、米機B2の焼夷弾攻撃をうけて、市内の繁華街をはじめ、全地域の八割強が焼失、しかも人口四九、四九五人と五万台を割った。

八月十五日、終戦宣言の玉音が放送され、敗戦が決定され、水戸も焼土から、近代都市への復興に立ちあがった。それから、二十余年、日本の南町の今日の姿を、誰が予測しし得たことだろう。

その指導的役割を、嘗々としてつづけた町内会役員諸氏の努力は、それが目だつた行為ではないだけに、なおさら高く賞賛されるべきだろう。